

記憶の中にあなたがいる  
笑いながら、手を振るあなた  
その声も、表情も  
触れようとするたびに  
霧のように消えてしまう

忘れることが怖いのに  
覚えているのが痛い  
そんな矛盾を抱えたまま  
私はこの家で生きている

「ただいま」と言えば  
心の中のあなたが返事をするような気がする  
「いつてきます」と言えば  
あなたが微笑みながら送り出してくれる気がする

でも、それはすべて幻だ  
あなたが戻ってくることはない  
私の呼びかけに  
答える声は失われたのだ

いくら暖房をつけても  
この家の空気は冷たく  
あなたのぬくもりさえ  
少しずつ消えていく  
手のひらに残る感触も  
いつか風に流されるだろう